

援助職のリカバリー

《29》

～「夫が、若年性認知症になった」(2)～

袴田 洋子

調剤薬局での仕事を終えた香は、駅前のスーパーに寄って、買い物カートをぼんやりと押していた。キャベツ、にんじん、ブロッコリー、たまねぎ。買おうと思って、手に取るが、「あ、まだあった」と、自宅の冷蔵庫の中身を思い出しては、手にした野菜を元の場所に戻すことを繰り返す。何を買うべきか、買い物に集中できない。

昼の休憩時に、クリニックの院長に、夫のことを相談した。相談する前から、院長が言ってくれるであろうアドバイスはわかっていた。専門医を受診するということだ。

「若年性認知症は、高齢の人とは状況がかなり違うから、早めに色々相談に行った方が良い」と院長は言ってくれた。その通りだと思う。だから、夫には、そう言った。でも、絶対に嫌だと言われた。だから、相談したかったのだけど…とため息をついて、手に持ったトマトを見つめる。あ、トマトはある、と、また陳列棚にトマトを戻す。香は、空のカートを入り口付近の置き場に戻し、自宅に向かった。

真衣との夕飯を終えたところに、信二が帰ってきた。真衣は、「宿題があるから」と言って、自分の湯のみ茶碗を持って、2階の自室にとっとと上って行った。父親の最近の「変な」様子を香に言ったあと、真衣からの報告は、なかった。心配をしているのか、していないのか、全く気にしていないのか、香には判断がつかなかった。でも、多感な年頃の子のことだ。全く気にしていないわ

けはないだろう。もしかしたら、母親である香の様子を気にして、何も言えないのかもしれない。それくらい、香の様子も日常とは、変わってきているのかもしれない。娘に心配をかけているのかと思うと、香は、情けなく思った。普段、薬剤師として、援助する側に立っている自分は、援助される側に立つことは、極めてまれだ。まれどころか、初めてかもしれない。夫が、若年性認知症だとしたら、自分は、患者の家族ということだ。立派に、援助される側。「患者さんって、こういう気持ちだったんだな」と、改めて、患者や、その家族の気持ちを思って、至らない気持ちになった。

夕飯を食べ終えた信二は、リビングのソファに座って、テレビを見ながら茶を飲んでいた。手に持った湯のみの中の茶をぐるぐる揺らしながら、「今日、喉が痛くて、風邪っぽかったから、丸山先生のところに行って、仕事のミスのことを話したら、新宿医大の物忘れ外来に行くよう言われたよ」と信二は言った。香は、食器を洗う手を止めて、

「え？ そうなの？」と反射的に言った。丸山先生とは、信二のかかりつけ医である「丸山内科」の院長だ。自宅から、車で10分ほどの距離で、店の常連客から「いい先生がいる」と聞いて、行ってみたところ、実際に、温和で話しやすい医者で、あっという間に、信二も丸山内科の患者になった。信二は、もう10年以上、丸山医師にコレステロールを下げる薬を処方してもらっている。

助かった、と思った。専門病院を受診してほしいと、もう一度、信二に言うことを決意したものの、どう切り出せばいいのか、思いあぐねていた。

この人は、ちゃんと色々、考えているんだ、と、夫の思いを想像すると、涙が出そうになった。けれど、出ない。出るほど、問題はシンプルには思えない。

「お父さん、新宿病院に行くの？」と、いつの間にか、真衣がリビングのドア横に立っていた。「え？」とまた、反射的に、香は言った。

「うん、ちょっと、やっぱり行ってみようかと思ってさ」

「それがいいよ。ちゃんと大きな病院で、専門のお医者さんに診てもらって。何でもなかったら、それで安心できるんだし」

真衣が、どこかの病院の看護師のように、患者を勇気付ける言葉を言うことに、香は驚いた。そして、やっぱり、気にしていたのだと思った。私より、娘の方が、大人だ。ぜんぜん、大人だ。もしかしたら、達夫のことも、真衣は知っているのだろうか。瞬間、心臓に氷水がかけられたような感覚に襲われたが、意識を「今」に戻した。

翌々日、再び丸山内科を訪れた信二は、新宿医大への紹介状を受け取った。正確には、診療情報提供書という書類だ。この書類があれば、初診時の高額な自費分を払わなくて済む。

新宿医大の初診予約は、香が電話した。最初、信二は、自分で電話しようとしたが、「他にも手続きのこととか、聞きたいことがあるから」と言って、香が電話をした。もし、必要なものを聞き忘れていたら、大変だと思ったからである。

真衣から「最近、お父さんが変」という報告を受けてから、信二の行動を観察した。そうすると、実際に、「え？　なんでそれ、そうするの？」という場面が、ぼちぼちと出現した。信二が使っている液体ハミガキを、買い置きがあるのに、さらに買って来た。キャッシュカードを無くして、さんざん家の中を一緒に探し、銀行に問い合わせをしようとしたところに、普段、全く使わない引き出しから出てきて、「まったくもう、なんで」と言いかけて、本人がひどく疲れた表情をしているのを見て、言うのをやめた。

初診日は、3週間後の金曜日になった。もう梅雨に入っているかもしれない。この一週間は、不安な毎日だった。医療従事者のくせに、こんなにも動揺するものなのだと思った。

動揺、ということだけではないだろう。これから一体、どうなっていくのか、全くの想定外の岐路に立たされたことの不安。夫が、本当に若年性認知症だったら、生活していけるのかという不安。生活費、真衣の学費、住宅ローン。経済的な事柄が、次から次へと思い浮かぶ。

達夫と会えなくなるかもしれない。そう思うと、急に、心細さが倍増して、達夫に LINE した。

「明日、行ってもいい？」